

日本医史学会平成20年11月例会 シンポジウム「森林太郎と森鷗外」

1. “統計論争”をとおしてみた森林太郎

——シンポジウムへの導入をかねて——

岡田 靖雄

青柿舎(精神科医療史資料室)

2007年6月23日の例会シンポジウム¹⁾では、シンポジウム「森林太郎と森鷗外」開催への期待をのべたが、それが3先生のご参加によりはやくもひらけたことは、たいへんうれしい。

I. 医師による森鷗外論(単行本)

医師による森鷗外論としては、木下杢太郎によるものが有名であるが、ここでは単行本になっているものをかぞえあげておく、——

- 1) 山田弘倫『軍医森鷗外』文松堂書店, 1943
森菘菟『森鷗外』養徳社, 1946
森菘菟『父親としての森鷗外』筑摩書房, 1969;ちくま文庫, 1993
- 2) 河村敬吉『若き森鷗外の悩み』現代社, 1957
河村敬吉『森鷗外の研究』清水弘文堂書店, 1969
宮本 忍『森鷗外の医学思想』勁草書房, 1979
宮本 忍『森鷗外の医学と文学』勁草書房, 1981
伊達一男『医師としての森鷗外』績文堂出版, 1981
丸山 博『森鷗外と衛生学』勁草書房, 1984
浅井卓夫『軍医鷗外森林太郎の生涯』教育出版センター, 1986
伊達一男『続医師としての森鷗外』績文堂出版, 1989
加賀乙彦『鷗外と茂吉』潮出版社, 1999
土屋重朗『鷗外をめぐる医師たち』戸田出版,

1998

- 3) 松木明知『渋江抽斎の研究』松木明知, 1985
松木明知『森鷗外「渋江抽斎」基礎資料』松木明知, 1988
山下政三『鷗外森林太郎と脚気紛争』日本評論社, 2008

これらのうち1)は、直接森に接した人のものであり、3)は今回シンポジウムの報告者のものである。2)にあげたものを通覧すると、脚気問題が充分にとりあげられてはおらず、また医学者—文学者としての全体像がえがきだされていない。

II. いわゆる“統計論争”の経過 (じつは第2次論争)

わたしは精神病学者呉秀三の生涯をおってきた^{2,3)}。下にみるように、かれに「統計ノ語ハ終ニ我ヲ機辟ニセリ」の文章(1889)がある。この文章の背景をさぐることからわたしの探求ははじまった。ともかくも、論争の経過をみておこう。

1887年(明治20年)

1月7日 呉秀三、在ドイツの森林太郎にエステルレン医学統計学の購入を依頼する手紙をだす⁴⁾

1888年(明治21年)

9月 エステルレン、呉秀三訳「医学統計論総論」が『スタチスチック雑誌』第29号にのる(あとは「エステルレン氏医学スタチス

チック」の題で、1889年3月の第35号まで；
つづいて、単行本にのらなかった各論部分が
第36号、第37号に)

1889年(明治22年)

2月23日 森林太郎「医学統計論ノ題言」、『東京医事新誌』(あとは『新誌』と略記)第569号。これに対し東京医事新誌局に匿名投書(今井武夫?)

3月23日 森「統計ニ就テ」、『新誌』第573号(名はあげずに杉亨二批判)

4月5日 エステルレン、呉秀三訳『医学統計論』,文昌堂(森「医学統計論題言」)

5月末 今井武夫「統計に就て」、『スタチスチック雑誌』(あとは『雑誌』と略記)第37号(森をからかい気味)

6月8日 森「統計ニ就テノ分疏」、『新誌』第584号(杉の名をだして批判)

7月末 今井「再び統計に就て」、『雑誌』第39号

8月10日 森(湖上逸民名)「統計三家論ヲ読ム」、『新誌』第593号；森(鷗外漁史名漢詩)「答今井武夫君」、『新誌』第593号(“発矢無的”, “妄談法則”など)

8月24日, 31日 呉「統計ノ語ハ終ニ我ヲ機辟ニセリ」、『新誌』第595号, 第596号

9月末 今井「三たび統計に就て」、『雑誌』第41号

10月19日 森(湖上逸民名漢詩)「読第三駁議。寄今井武夫君。用鷗外漢史韻」, 『新誌』第603号

10月26日 森(忍岡樵客名)「三たび統計ニ就テ」ヲ読ム, 『新誌』第604号

11月2日, 9日 森(湖上逸民名)「統計ノ語ハ其定義ニ負カズ」, 『新誌』第605号, 第606号

12月末 今井「四たび統計に就て」, 『雑誌』第47号

今井の最後の論文は“未完”となっているままである。スタチスチック社に今井をとめる人がいたのか。論争の中心は、統計/スタチスチックは

国情学(Demographicの訳か)か方法か、また統計の訳語は適切か、であった。論争の調子は、今井がからかい気味にでたこともあって、双方ともかなり感情的になっている。途中からは、森のたみかける激しさが目だってきた。呉の文章は、統計の語はすでに定着している、統計には実学、方法の両面があることをのべ、両者が矛をおさめることをよびかけていた。

Ⅲ. “統計論争”の背景, 第1次および第3次の統計論争

今回報告した内容のほとんどは、わたしが1973年から1978年にかけて3論文^{5,6,7)}ですでにのべたものである。ここにいう第1次論争は当時までには注目されていなかった(その後にこれをとりあげたものがあるかどうかは、たしかめていない。)

“統計論争”の背景をなす事情をまずみておこう。

1. 関係した人

杉 亨二(1828-1910)

日本統計学の開祖であるが、著作はほとんどない。スタチスチック社社長、東京学士会会員。1881年統計院大書記官になったが、1885年統計院廃止により非職。在官時代から在野的だった。“スタチスチック”の語に執着して、“移智契”などの表記をつくった。

今井武夫(??-??)

共立統計学校卒、スタチスチック社幹部。東京府につとめていた。

呉 文聰(1851-1918)

呉秀三の兄、日本に統計学を根づかせた人で著作がおおい。はじめ政表課で杉の下僚だった。あと秀三と区別しては“呉(文)”と略記。

森林太郎(1862-1922)

1881年東京大学医学部卒。

呉 秀三(1865-1932)

1890年帝国大学医科大学卒。精神病学者。森の弟篤次郎と同級で、その縁で林太郎と親交をむすんだ。『医学統計論』出版当時は学生。

2. “統計”の訳語（とくに明治政府のなかで）

1871年（明治4年）大蔵省に統計司（→統計寮）
 1880年（明治13年）大蔵省調査局→会計部統計課（杉，呉〔文〕）
 1881年（明治14年）大政官に統計院（杉大書記官）
 1882年（明治15年）『日本帝国統計年鑑』発刊

このように、官庁用語として“統計”の用語（訳語）は、“統計論争”のまえからほぼ確立していた。

3. スタチスチック社と統計協会

	スタチスチック社 (在野)	統計協会 (官より)
1876	表記学社設立（杉社長）	
1878	スタチスチック社と改名	製表社設立
1879		統計協会設立（←製表社）
1880		『統計集誌』発刊， 呉（文）編集委員
1883	統計院有志拠金で共立統計学校開設	
1884		呉（文）“面白くないことがあって”， しかしその後も有力な一人
1886	共立統計学校廃止，資産は統計協会に	
	スタチスチック社再発足（杉社長，今井幹事，呉〔文〕社員）。『スタチスチック雑誌』発刊（杉「スタチスチックの話」がのる）	
1887	今井幹事，呉（文）議員	
1890	呉（文）主幹，今井幹事	
1892	統計学社と改称	
1917	呉（文）副社長	

共立統計学校は第1回の卒業生を出しただけだったが、今井はその一人。全体としては統計協会よりもふるわぬ気味のあるスタチスチック社で、統計協会の有力な一人であった呉文聰がだん

だん評価されてくる（今井はおもしろくなかったのではなからうか）、という事情がうかがえる。こういうなかで、第1次、第2次統計論争がおこった。

4. 第1次統計論争——これは岡田論文（1978）⁸⁾

までは、注目されていなかったものである。

1887（明治20年）7月 呉（文）『統計詳説・上——一名社会観察法』（下巻は『応用統計学』として1888年6月）

1888年7月 今井「統計詳説の著者に質す」、呉（文）「統計詳説著者の資格を以て今井武夫君の質疑に答ふ」。『雑誌』第27号

同9月 今井「再び統計詳説の著者に質す」、『雑誌』第29号

同10月 呉（文）「再び今井武夫君に答ふ」、『雑誌』第30号

統計学は国情学を主とする（今井，杉になら）い）か、補助科学としての面も重要である（呉）か。“統計”の訳語は問題となっていないが、統計学の本質についての論争は、第2次論争の先駆けである。双方とも感情的にはなっていない。

5. 第3次統計論争

1894年（明治27年）4月25日 藤沢利喜太郎「統計活論」、『東洋学芸雑誌』第151号

同5月11日，12日 呉（文）「藤沢博士の統計活論を読む」、『東京日日新聞』

同6月25日 藤沢「再び統計を論ず」、『東洋学芸雑誌』第153号

同7月，8月 呉（文）「統計の事を論じ併せて藤沢博士に質す」、『統計集誌』第155号，第156号

藤沢は1889年に帝国大学法科大学で統計学を講じ、1919年には東京帝国大学理科大学で数理統計学を開講した人。藤沢の呉（文）批判は、数理統計学派による社会統計学派批判であった。

第1次論争から第3次論争までを通じては、国情学—社会統計学—数理統計学というスペクトラムのなかでの、統計学の位置づけが論じられたのである。

IV. 森林太郎

——森鷗外論のあたらしい展開のために

“統計論争”における森林太郎の姿勢でまず目につくのは、学識の深さと瞬発力とで、数日で20名近い学者の名をあげる論文をかいている。つづいては、相手をあくまでもやっつける攻撃性で、朝青龍的ともいえる。また、弟分呉秀三をまもりぬこうとする構えと同時に、長老杉亨二への敵意・攻撃性があらわである。総じては、過度に防衛的、攻撃的である点が感じられる。これには、1874年の東京医学校予科入学に生年を2年はやくした“背伸び”の姿勢が関係しているのではないか。“背伸び”の姿勢は、潜流となりながらも一生つづいたとかがえられる。

これまでの森鷗外記念会で目だったのは、2004年まで理事長であった長谷川泉の恣意的運営である。つぎには、『森鷗外記念会通信』第26号(1973)から第119号(1997)に連載された小堀杏奴(森林太郎第2女)による「本質とは」での、自分たちを批判するものに対する、はげしすぎる攻撃性である。その攻撃性は、森林太郎が“統計論争”でみせたものをおもわせる。

つぎに注目したいのは、森茉莉(森林太郎第1女)という不思議な存在である。かのじょは、『甘い蜜の部屋』、『恋人たちの森』、『枯葉の寝床』などの特異な作品をかいた。現在、“ヤオイ”とよばれる、男の同性愛を主題とする漫画・小説の群があり、それをかくのも・よむのも、おもに女だという⁹⁾ (“ヤオイ”の由来は“やまなし・おちなし・いみなし”)。森茉莉の少年愛をあつかった上記作品群がその源流とされている。ところでわたしは、東北帝国大学医学部の初代小児科教授佐藤彰の娘、小関弘子さんの話をうかがう機会があった。その生母は、呉秀三の師であった榎俣の娘令子であったが、この人は1927年に34歳で死去したため、佐藤の後妻としてきたのが森茉莉である(入籍はしなかった)。森茉莉は家事能力にかけ、たべたければ自分だけたべにでかけ、たえず三越百貨店に買い物にいき、また“弘子”の名をあやまってかいた。東京の森家に茉莉につれら

れていったときは、その雰囲気のおどろいたという(当時小関さんは小学4年生)。

父に溺愛されてそだった森茉莉が、のちのちまで生活人として失格だったことは、他の人によってもつたえられている。こういう人をつくりだすについて、父親の育て方の問題は否定しきれないだろう。親孝行というよりは、母親の影響を脱しきれなかった森林太郎の、前妻、後妻との関係もかなりひずんだものであった。はかりしれぬ闇をいただいたかれの家庭生活の分析を通じて、かれの性格をみなおしていく必要があるであろう。そして、かれの性格を通じて、軍医としてのかれの行動、そして作品を検討しなおす必要があるのではなからうか。

そこで、森林太郎—森鷗外研究のあたらしい展開のためには、つぎの点が要求されよう、——

- 1) 崇拜・批判排除を脱する、
- 2) 脚気問題の正当な位置づけ、
- 3) 医学者の面と作家の面との照合→統一、
- 4) かれの性格の解明(とくに家庭生活の分析をとおして)。

数年先に、シンポジウム「森林太郎と森鷗外」の第2部がひらかれることを期待したい。

文献

- 1) シンポジウム、医史学と文学——吉村昭氏を追悼して。日本医史学雑誌 2007; 53(4): 627-658
- 2) 精神医療史研究会編。呉秀三先生—その業績。東京：呉秀三先生業績研究会；1974
- 3) 岡田靖雄、呉秀三 その生涯と業績。京都：思文閣出版；1982
- 4) 呉秀三。(書簡)。日本からの手紙。滞独時代森鷗外宛 1886-1888 (日本文学研究資料叢書・6)。東京：日本近代文学館；1983, p. 84-96
- 5) 岡田靖雄・吉岡真二・長谷川源助。呉秀三先生と周辺の人びと—とくに森鷗外と呉文聰との関係をめぐって—。医学史研究 1973; 41: 34-40
- 6) 岡田靖雄。森林太郎“統計論争”の背景。医学史研究 1978; 49: 1-13
- 7) 岡田靖雄。森林太郎と呉秀三(その人たちの横顔) 4)。6号線 1978; 7: 64-78
- 8) 岡田靖雄。6)に同じ
- 9) 村田智子。「ヤオイ」と呼ばれる作品群と「子供がぶたれる」の空想—作品と白日夢—。日本病跡学雑誌 2007; 93: 15-24